

横浜市インフルエンザ流行情報 13号

横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所

《トピックス》

- 市全体で流行警報解除基準値（定点^{※1}あたり 10.00）を下回りました。
- 区別では、依然として流行警報解除基準値を上回っている区もあり、引き続き注意が必要です。

【概況】

2015年第7週(2月9日～2月15日)の定点あたりの患者報告数は、横浜市全体で **9.31** と、前週の 15.27^{※2} から減少し、**流行警報解除基準値を下回りました**。学級閉鎖施設数、インフルエンザ入院患者数も減少傾向です。

第7週の迅速キットの結果は **A型 89.9%、B型 9.8%** で、シーズン後半にもかかわらずB型の著明な増加は見られていません。

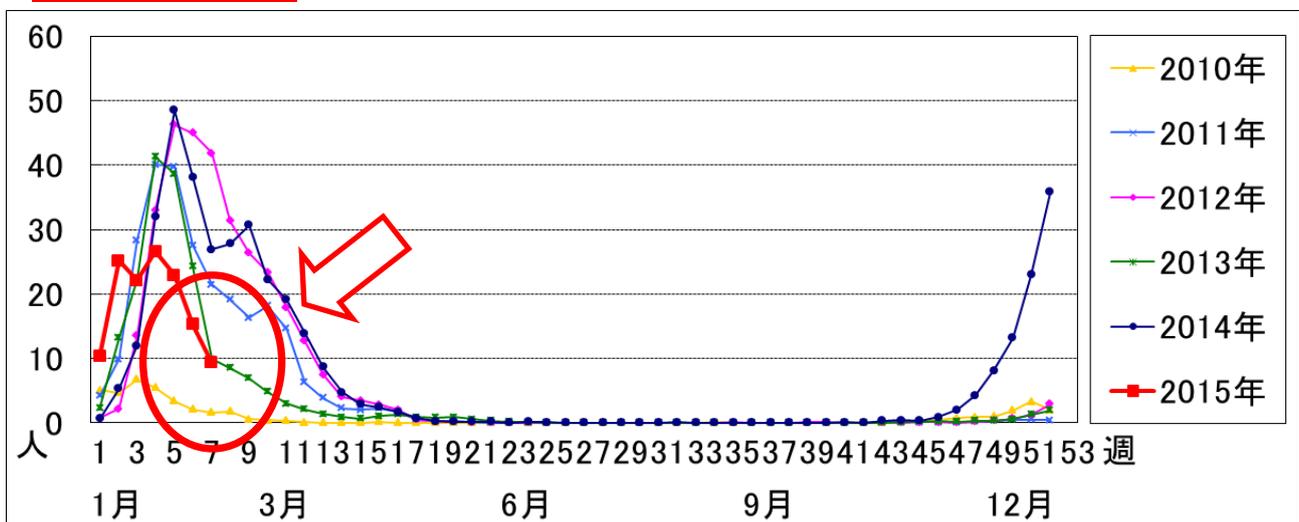
区別では **港南区 16.57、神奈川区 16.44、栄区 12.83** などでもまだ報告数が多い状態です。予防には手洗いや早期受診などの対策^{※3} が重要です。

※1 定点・定点とは、毎週インフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内約150か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 前週 15.27・前回の流行情報では第6週 15.51と報告しましたが、その後医療機関から追加報告があり、数値が変動しました。

※3 [インフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

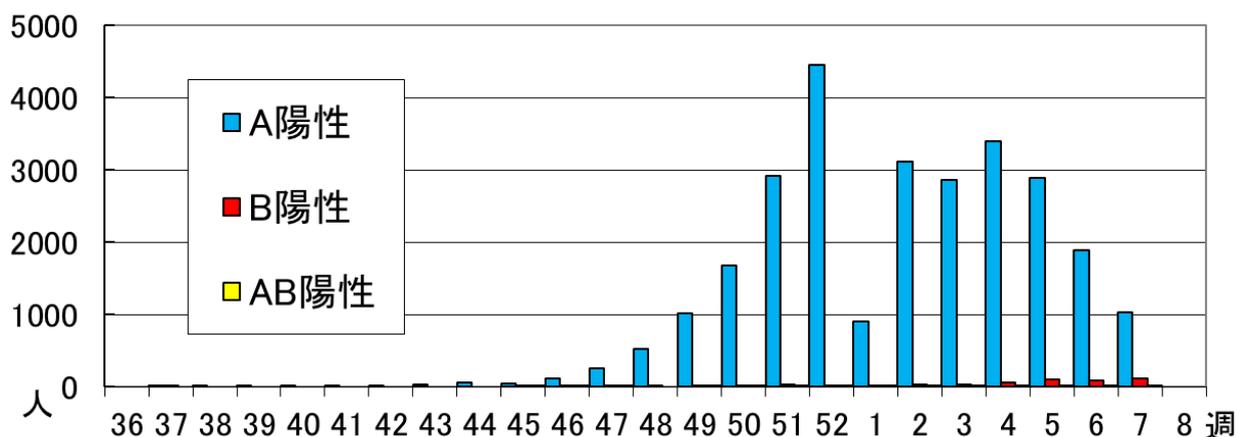
- 1 **市内流行状況**: 定点あたりの患者報告数が第7週 9.31 と**昨シーズンより6週早く警報解除基準値を下回りました**。今シーズンは流行開始、減少とも例年より早くなっています。



参考: 近隣自治体の流行状況 [東京都](#)、[神奈川県](#)、[川崎市](#)

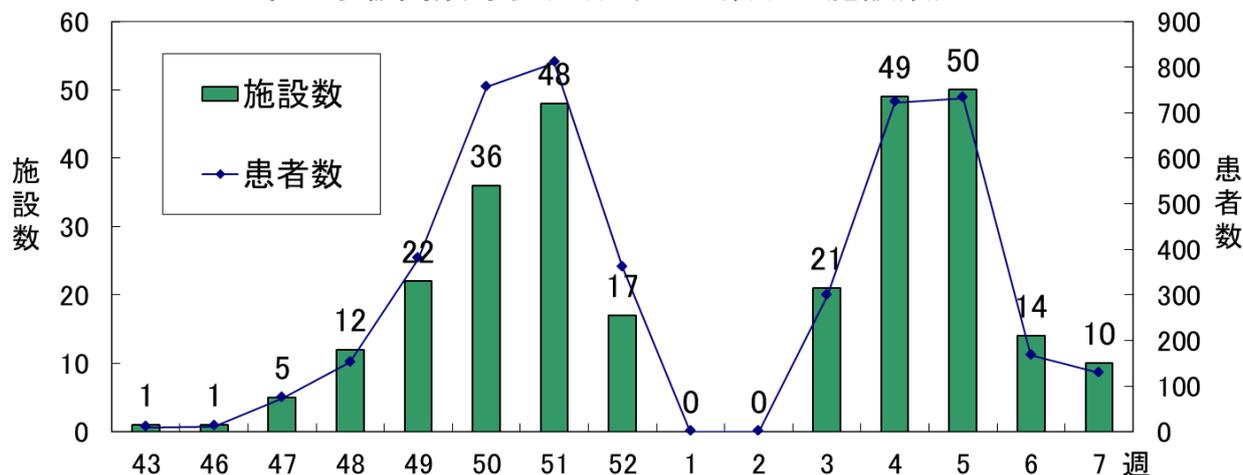
2 迅速キット結果:第7週はA型89.9%、B型9.8%、ABともに陽性0.3%と、シーズン後半でもB型の著明な増加はみられていません。

迅速診断用検査キットによる型別の報告数(2014年36週~2015年7週)



3 学級閉鎖施設数:第5週以降減少傾向です。第7週の施設種別では、小学校5件、幼稚園3件、中学校1件、その他1件でした。

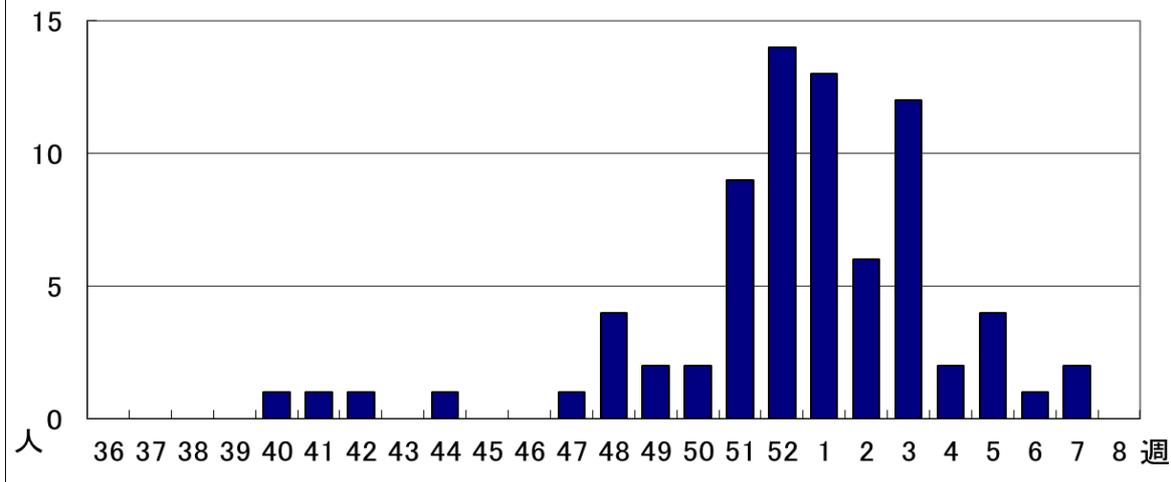
市内学級閉鎖等状況(グラフ内数字は施設数)



4 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※4}におけるインフルエンザ入院患者は、最も多かった第52週付近から減少傾向です。

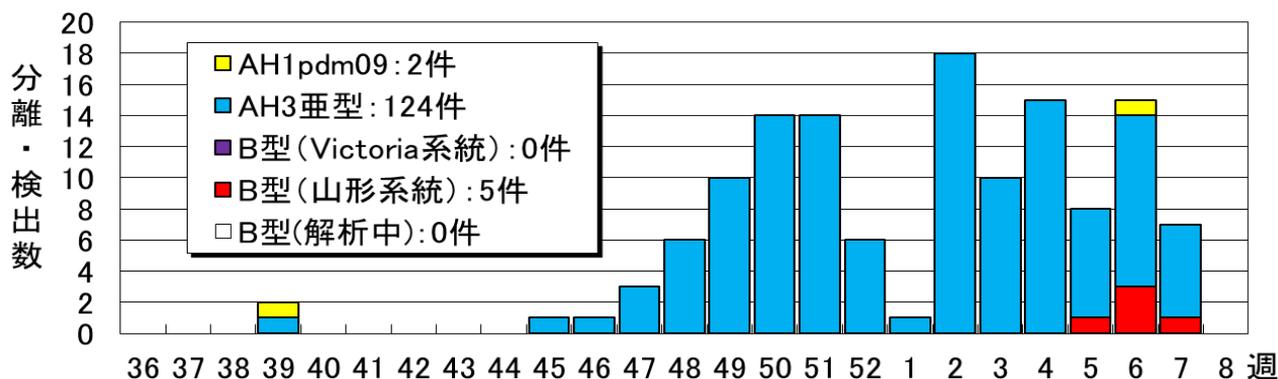
※4 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。

基幹定点医療機関でのインフルエンザによる入院患者報告数



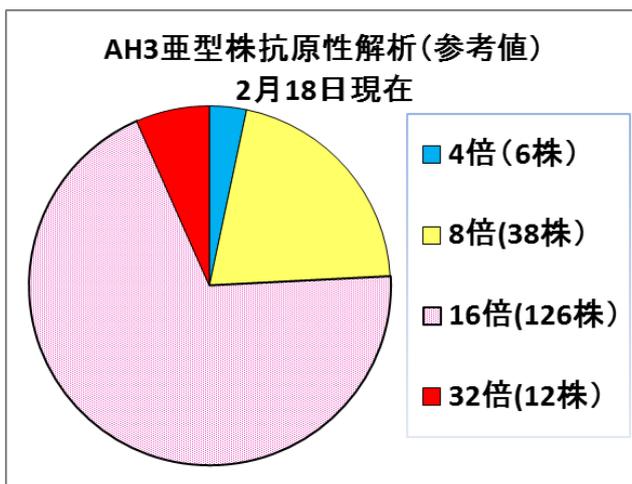
5 市内病原体検出状況:市内では病原体定点から2月18日までに今シーズン計131件インフルエンザウイルスが分離・検出されました。AH3亜型が124件(94.7%)とほとんどを占めています。第5週以降B型が5件検出され、それらはすべて山形系統でした。

病原体定点からのインフルエンザ分離・検出情報(2月18日現在)

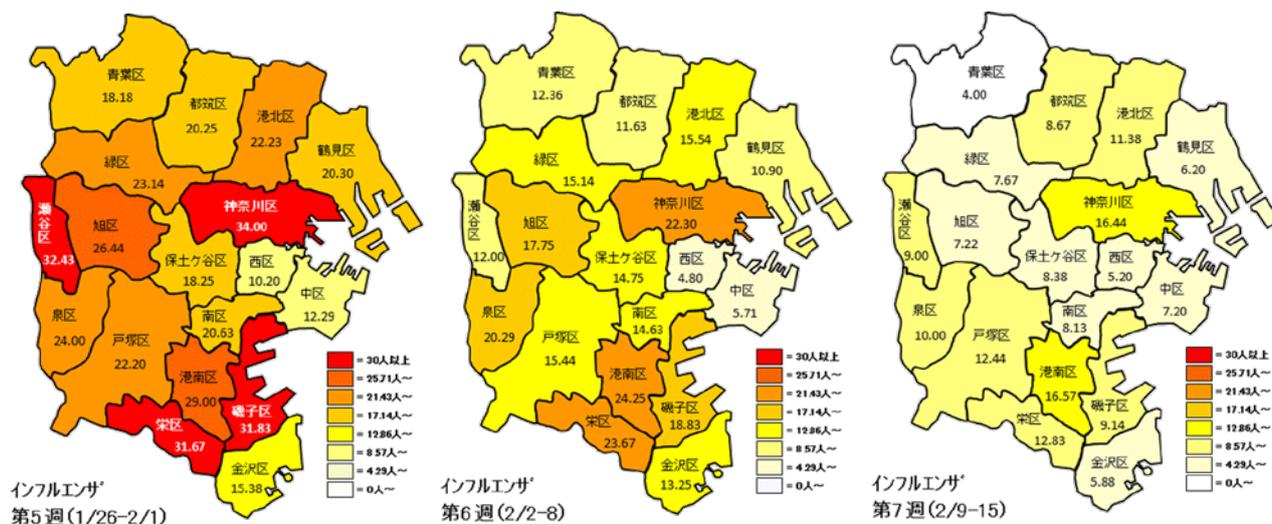


6 分離株の抗原性解析と薬剤感受性検査:

市内で検出された AH3 亜型株(病原体定点以外も含む)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)では、ほとんどの株が HI 価 8 倍以上でした。一般的に 4 倍以内でワクチン株と類似していると言われています。ただ、今回の解析にはウサギの血清を使っており、参考値です。正確な結果は国立感染症研究所での分析を待つ必要があります。薬剤感受性試験では、横浜市内の株で今シーズン検査した範囲では、オセルタミビル(タミフル)、ペラミビル(ラピアクタ)、ザナミビル(リレンザ)、ラニナミビル(イナビル)への感受性低下は認めていません。



7 地図で表した直近3週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)



今シーズンのインフルエンザ流行情報は今号が最後です。(再び報告数が大幅に増加した場合は発行します。)今後の流行状況は横浜市感染症情報センターホームページに掲載している「最新の感染症発生状況(横浜市内)」の「週報」の「定点情報」をご参照ください。